



故人を偲び感あり①

中村 悌次

今年もまた惜しい人が先に逝った。「私より先に死んで悲しませるでないぞ」と訓示したのもむなく、私が老醜をさらしている間に、素晴らしい人たちが去っていった。老少不定は世の常というものの、誠に残念であり、謹んで今までになくなった方々のご冥福を祈ります。

石丸伍長だけはきつと、長く生き残ってくれと確信していた。どんな悲運にも負けないで、愚痴一つ言わず敢然と立ち向かい、与えられた境遇の中で最善を尽くす。闘志と努力は君の真骨頂であった。君の人生は決して幸運に恵まれ

たとは言えないだろう。人生行路には思いがけないことが横たわっているものである。志を立てた海軍は消滅し、冶金工学として選んだアルミニウムは斜陽産業となった。いずれもその当時想像も付かないことである。しかし彼は決してこれに負けないことである。明るく現実を受け止め、総て前向きに応じて自ら道を切り開いた。あれだけの能力と見識、そしてあの人柄を以てすれば、大海軍の中樞をにない、或いは大企業の経営者として、立派に成功していたものと確信する。それだけの力を活かす機会を得なかったことは惜しまれるが、彼自身は顧みて悔いなき人生であったとあの微笑みを見ているだろう。

父のこと

石丸 雄次

私は昭和46年生まれであるので、これを読まれる方は、私にとって恐らく皆大先輩にあたる。私は、父が40代半ばの頃の子供で、悪いことはかりしていたし、さぞ扱いに困ったに違いない。もっとも意思疎通が出来ていなかった訳では無いし、むしろ父親と年の近い家族と比べても、話すことは多かつたかもしれない。そのことで、『考える』ことが出来る人間になれたと思っ

ている。

今回は、母親を通じて、佐藤さんより頼まれて書くことになったわけだが、どんなことを書けば良いのか分からず、過去の皆さんの文章を拝読させて頂いた。日頃、父親から、本を読むのが足りないとか、本を読まなければ知識は身につかんと言われたが、皆さんの書いた文章を拝見し、あらためてその知識の無さを痛切に感じた。因みに、佐藤さんには、私が小学生の頃、新さんの息子さんと一緒に伊豆でお世話になった。お世話になりつつ放しで、何もお返しをしていないのだから、今回要望に応じるのは当然だが、文章が下手なので、かえって迷惑にならないかと心配だ。父親を思い出して文章にする機会なんて、普通の人には無い訳だから、大変ありがたいと思っ

ている。

私は、勉強があまり得意で無かった、というよりある程度頑張ると、そこそこの成績が取れたので、一生懸命勉強することがあまり無かった。これも日本が平和になった証拠だと話したことがあったが、父からは人事みたい